

学びほぐし

Unlearn

永田 円了



鶴見俊輔氏がハーバード大の学生だった夏休み、ニューヨークの日本図書館でヘレン・ケラーに出会う。

「私はハーバードの学生です」というと、ヘレン・ケラーは、「私はその隣のラドクリフ女子大でとてもたくさんあなたのことを学んだ。だがその多くを“Unlearn”しなくてはならなかった」と言った。



Unlearn とは、単に“捨て去る”“忘れる”(研究社 Collegiate)の意味ではなく、今まで学んだことがらを、既習の知識に囚われず、いったんふるいにかけてみる、ということである。一言でいえば、“学びほぐす” - 私の大好きなコトバである。既製品のセーターを編み直し、自分の体型に合うよう作り直すこと、という理解しやすい。

“学びほぐし”は容易ではない

人はものの見方、考え方について、固有のクセをもっている。それが先入観と言われるものである。その先入観といゆるものは、実に頑固で知らず知らずの間に空気のようにどこへでも入り込み、人の思考を左右する



龍馬は、いつも学びほぐしをしていた。
龍馬の姉、乙女が尋ねる、「龍馬、おまんは一体毎日何を考えて生きちゅら」
龍馬が答える、「どういて目くそは、目頭から出るがかのう」。当時当然とされていたもの(=当時の制度)に投げかけた龍馬の疑問はその後、人の心を動かし、日本を変えていくことになる。

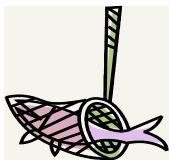
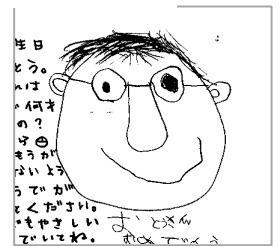
人は、なぜ学ぶことが必要なのか

学校で勉強なんかしなくても、実社会で体得する直感や経験のほうが生きていく上でずっと有効ではないのか？
この疑問に生物学者、福井伸一氏は答える。

「私たちが規定する生物学的制約から自由になるために、私たちは学ぶのだ」。では“生物的制約とは何か？

「私たちが今、この目で見ている世界は、ありのままの自然ではなく、加工され、デフォルメされたものである。ヒトの目が切り取った『部分』は人工的なものであり、ヒトの思考が見出した『関係』の多くは、妄想でしかないとも。直感が導きやすい誤謬(ごびょう)を見直すために、あるいは直感が把握しづらい現象へ、イマジネーションを届かせるためにこそ、人は学ぶ必要がある、それが私たちが自由にすることなのだ」と述べる。

福岡伸一著 『動的平衡』 木楽舎



アメリカの諺に、「空腹な彼に魚を与えれば、すぐにも空腹は満たされる、しかし、彼に魚の釣り方を教えたなら、彼は一生食べていける」がある。

“If you give him a fish, he will have a meal, but, if you teach him how to fish, he will have a living.”
人はお腹がすくと、手っ取り早く目の前の魚に飛びつく、腹が減っているから仕方がないと言う。安易な方法を選ぶ前に、困難ではあるが、自立の道をえらぶこと、でもこの学びほぐしはなかなか容易ではない。

脱・脳化社会のすすめ



このように、“学びほぐし”は容易ではない、手立ではないのか、養老孟司氏は次のように提案する。「違う土地へ行行って、違う空気を吸う。人間そうやって自分を変えていく。相手が変わるんじゃない、自分が変わる。自分はいつも同じと思っている人が多いけど、それは違う。

むずかしく言えば“安定的平衡点”に落ち着いている、それが移動することでズれる、そう、ズれることで“学びほぐし”ができる。(小学館『DI ME』2009.5.5)